一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがあります。）

宮下くんには『人の上に立ちたい』という欲がない。向上心がない、と言う人もいるだろうが、自らの意思で上の地位を求めない。与えられた場所で慎ましやかに生きようとする平和主義者だ。

中学二年生の体育祭の時も受け身だった。毎年各クラスから一組ずつ二人三脚レースに出場することになっているのだが、男女のペアなので恥ずかしがって誰もやりたがらない。立候補したら『スケベ』『エロいな』と弄られる空気が蔓延していた。思春期にはありがちな心の動きだ。

担任が公平にくじ引きで決めることを提案しかけた。でも二人三脚をどうしても回避したいクラスのボスが「推薦で決めよう」と言い出し、クラスで最も冴えない男女の名を挙げる。みんなはこれ幸いとボスに賛同した。

黒板に書かれた私と宮下くんの名前を見て、①私は血の気が引いた。足がもつれて宮下くん共々転びやしないか？　それをみんなが笑い物にするイメージがありありと浮かぶ。私だけならまだしも、他人に迷惑をかけることに縮み上がっていた。

体育祭一週間前に、全校生徒による予行演習が行われた。リレーの選手はバトンパスの練習をしたり、ムカデ競争の選手は並び順を決めたりしている。

「二人三脚の練習をしよう」と宮下くんは私に声をかけた。

「練習しても無駄だよ。私、鈍くさいから」

恥をかくのは本番だけでいいし、男女ペアになって練習するのが照れくさい。他のクラスの二人三脚の出走者は練習していないから、目立っちゃう。

「やってみないと無駄かどうかわからない。だから練習しよう」

「うーん……わかった」と渋々了解する。

「利き足はどっち？」

「えーと、わかんない」

利き足を意識したことがない。体育で幅跳びや高跳びの時に困るけれど、どっちの足が利き足かわからなくても今まで生きてこられた。

「利き手は？」

「右」

「じゃ、たぶん利き足も右だね」

なんで利き足をしつこく確かめるんだろう？

「宮下くんは？」

「僕も右。だけど、女子の方が脚力はないから、譲るね」

何を言っているのか理解できなかった私は要領を得ない顔をしていたようだ。

「一般的に利き足の方が筋力はあるんだ。だから女子は利き足を結んだ方が走り易いと思って」

と宮下くんは説明してくれた。

「そっか。利き手の方が重たいものを持てるもんね」

負荷をかけるなら筋力がある方がいい、ということか。

「もしやってみて逆の足を結んだ方が走り易そうなら、言って」と私の【　1　】と自分の【　2　】を鉢巻で固定した。
「うん」
「じゃ、真ん中の足からスタートしてみよう。初めはゆっくりでいいから」
「私は【　3　】ってことだよね？」
「そう。僕は【　4　】から」
「わかった」
宮下くんが「せーの」と合図してスタートする。でもタイミングが合わない。小柄な宮下くんは百五十五センチの私と身長がほとんど変わらないので、歩幅はほぼ同じだ。それなのに、三歩目で大きなずれが生じてしまった。私は三歩目の【　5　】を出すのが遅れて、宮下くんの【　6　】に引っ張られるような形で尻もちをついた。
宮下くんは足を止めて「ごめん。大丈夫」と謝る。ちょっと涙で目が潤んでいるのは痛いからじゃない。情けないからだ。周囲からクスクス笑う声が聞こえる。耳に届いていなくても、視線と口の歪み方でわかる。みんな何をやっても駄目な私のことを馬鹿にしているんだ。
「立てる？」
私は差し出された宮下くんの手を無視して自力で立ち上がる。彼の手を握ったら②ギャラリーが沸いてしまうから。
「歩くところからやってみよう」
「やっぱ、練習しても無駄だよ。恥をかくだけ」
「恥ずかしいことを恥ずかしがってやることが一番恥ずかしい。どんなことでも全力でやれば笑われないよ。もし笑う人がいたら、その人が一番恥ずかしい人なんだ」
一言一言が私の胸に深く刺さった。

A　たぶんない。
B　でも私は素直じゃなかった。
C　最初から『自分なんかが』と諦めていた。
D　失敗を恐れて恥ずかしがってばかりいた。
E　私は今まで全力で何かをしたことがあったっけ？
F　屈折した私の心が宮下くんの真っ直ぐな言葉を拒絶する。

「頑張っても無意味だよ。③みんな私たちのことを笑いたいんだから」
「人生は楽しいことばかりじゃないよ」
「知ってる」
「でも嫌なことを押し付けられた時に、嫌々やっていたら人生が勿体なくない？」と宮下くんは表情を崩さずに［a］言った。
「だから二人三脚を頑張るの？」
「そう。僕は④受け身の人間だ。発想力や行動力はない。だから受け取ったことは全力でやろうと思っている。押し付けられたことでも一生懸命に取り組めば、自分の財産になる。頑張った事実が今後の自分を前向きにさせてくれるんだ」

大人たちはなんの保証もないのに、『頑張ればいいことがある』と言う。⑤馬鹿の一つ覚えだ。いくら私が馬鹿でも繰り返し騙されれば、努力しても報われないことに気付いた。親も先生もテレビもみんな嘘つきだ。

中でもお母さんの言葉は薄っぺらだった。四六時中頑張って家計を支えても、お父さんが一晩の豪遊や一レースに注ぎ込んでパーにしたのを何度も見てきた。この家にいる間は頑張っても無駄なんだ。いや、家を出ても私にもお父さんと同じ血が流れている限り、何をやっても無意味なのかもしれない。

宮下くんは人生を悲観していた私に希望を抱かせた。最初から諦めることが心に染み付いているから何もできないのだ。よい結果を残せなくても、やりきった事実は残る。その事実の積み重ねが自分に自信を与えてくれる。いつかこんな私でも胸を張って生きられる気がしてきた。

「歩くところからやってみる」と私は感化されて前向きになる。

「掛け声をかけよう。『一！　二！』って。『一』が内側の足。『二』が外側で」

「うん」

「あと、僕のことはなんとも思ってないよね？　好きでも嫌いでもない？」

なんで急にそんなこと訊くんだろう？　胸がおかしな音を立てた。でも特に意識していなかったから「うん」と頷いた。

「よかった。一緒だ。僕もなんとも思ってないから、肩を組んでも大丈夫だよね？」

ああ。そういうことか。気のない人同士だから問題ないよね、という［　b　］だけだ。本当になんとも思っていなかったけれど、⑥心がシュンと萎んだ感覚がした。

ゆっくりしたテンポで『いーち！　にーい！』と掛け声を合わせて歩く。難なくできた。少しずつテンポを上げていっても、問題なく歩ける。通常の歩行スピードでも苦にしなかった。

「次は、走ってみようか？」

「うん」と返事した私は自信が漲っていた。

⑦ちゃんと走れそうな気がする。いいイメージしか湧いてこない。実際にやってみても、びっくりするほど上手に走れた。歩くところから練習し直したから、自然に宮下くんと呼吸を合わせられるようになったみたいだ。周囲から『肩組んでるよ』『ラブラブじゃん』と冷やかされたけれど、お互いに支え合うことで走りが安定する。宮下くんと⑧［　c　］心［　d　］体になった気分で走ることができる。

本番は私たちがぶっちぎりで一位だった。練習の成果を思う存分出し切って、私が一人で走るのと変わらないスピードを二人三脚でも出せた。クラスメイトは私たちの激走に目を見張ったと思うが、ゴールした直後の私は周囲の目を気にしていなかった。

ゴールテープを切った瞬間、何か大事なものを落としたような気持ちになり、そわそわしていた。宮下くんが「やったね！」と喜びを分かち合おうとする。普段の無表情が嘘のように顔を綻ばせる。でも⑨私は心ここにあらずだった。

宮下くんが私たちを結んでいた鉢巻を解くと、不安感の正体がわかった。彼と離れたくなかったのだ。二人三脚を走り終わったから、私たちはただのクラスメイトに戻る。もう挨拶を交わすこともないだろう。

（白河三兎『ふたえ』による）

問1　――線①「私は血の気が引いた」理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　運動が苦手な私のことなので、宮下くんと一緒に走ると、より派手に転んでしまいそうなことが心配されたから。
ロ　誰もやりたがらない二人三脚でも、転んでしまえば、クラスの体育祭の成績に影響が出てしまいそうだったから。
ハ　私だけでなく、一緒に転んだ宮下くんも笑い物にされて、嫌な思いをさせてしまいそうなことが想像されたから。
ニ　私と宮下くんの名前が、並んで黒板に書かれたことで、宮下くんが変な勘ちがいをする姿がイメージできたから。

問2　【　1　】～【　6　】に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

	1	2	3	4	5	6
イ	右足	左足	右足	左足	右足	左足
ロ	左足	右足	左足	右足	左足	右足
ハ	右足	左足	右足	左足	左足	右足
ニ	左足	左足	左足	右足	右足	左足

問3　――線②「ギャラリーが沸いてしまう」と同じ表現になるように、次の文の【　　】に当てはまる五字の言葉を、これより後の文章中からぬき出して答えなさい。

・ギャラリーに【　　】てしまう。

問4　‐‐‐‐線で囲まれた部分にあるA～Fの各文を意味が通るように並べかえた順序として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　F → E → D → C → B → A
ロ　F → D → C → B → E → A
ハ　E → B → C → D → A → F
ニ　E → A → C → D → B → F

問5　――線③「みんな私たちのことを笑いたいんだから」と同じように、「私たち」がみんなから下された評価について書かれている表現を十二字でぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問6　[a] に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　渋々と　　ロ　切々と　　ハ　淡々と　　ニ　綿々と

問7　――線④「受け身」である宮下くんの生活態度を「私」はどのようなものと捉えているか。次の文の【　　】に当てはまる十八字の表現を文章中からぬき出し、最初の三字を答えなさい。

・【　　】という態度。

問8　――線⑤「馬鹿の一つ覚え」が正しく用いられている文を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　あの人はスピーチというと馬鹿の一つ覚えで同じ話ばかりだ。
ロ　今まで私は馬鹿の一つ覚えでバスケットボールを続けてきた。
ハ　こつこつ続けてきたので大事な所で馬鹿の一つ覚えが出せた。
ニ　この事件を馬鹿の一つ覚えとして警備に万全を期すつもりだ。

問9　［　b　］に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　安全弁を開けた　　ロ　金字塔を立てた　　ハ　風呂敷を広げた　　ニ　予防線を張った

問10　――線⑥「心がシュンと萎んだ感覚」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　宮下くんの不意の質問から始まった会話を通して、やはり宮下くんも他の人と同じように自分のことを馬鹿にしているのだと気付き、悲しく思っている。
ロ　宮下くんの不意の質問によって、宮下くんをはじめて異性として意識したものの、彼は私をなんとも思ってないということを念押しされて傷ついている。
ハ　宮下くんの不意の質問によって、それまで二人の間ではぐくんでいた関係にひびが入り、親友にめぐり会えたと信じていただけに恨めしく思っている。
ニ　宮下くんの不意の質問から、自分が宮下くんのことを本当は意識していることがはっきりしたが、それを素直に言えなかった自分にがっかりしている。

問11　――線⑦「ちゃんと走れそうな気がする。いいイメージしか湧いてこない」とあるが、このような私の物事に対する姿勢を表す三字の言葉を、本文中からぬき出して答えなさい。

問12　――線⑧「［ c ］心［ d ］体」が、「別々のものが心も体も一つのもののように強く結びつくこと」という意味になるように、［　　］にそれぞれ適当な漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

問13　――線⑨「私は心ここにあらずだった」とあるが、この時の「私」の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがあります。）

「故郷（ふるさと）」は次のような歌詞である。

①兎（うさぎ）追ひし（い）　かの山
小鮒（こぶな）釣りし（つ）　かの川
夢は今も　めぐりて
忘れがたき　故郷

如何（いか）にいます　父母
恙（つつが）なしや　友がき
雨に風に　つけても
思ひ出（い）づる　故郷

志を　はたして
いつの日にか　帰らん
山は青き　故郷　水は清き　故郷

この歌を聞けば、古い世代はなつかしい田園地帯の景色を思い浮かべるであろう。若い世代は、情景は浮かばないが、何度か聞いたことがあるという程度かもしれない。【　A　】、自分は都会で育ったけど、故郷を思い出す世代について想像するという人もいるだろう。

私は戦後の「団塊の世代」に属すが、この歌は子供の頃からよく聞き、歌いもした。大人になって友人と談笑していてこの歌のことになり、「あれ、ウサギがおいしいって思っていた」、「ウサギがおいしい山ってどういう意味だよ」などと笑い合ったりする。それだけ、共有できる歌だといえる。歌は世代によって好まれるものが大いに違い、歌に興味をもつようになる中学、高校生くらいに聞いた歌は、三年も違うと入れ替わるから、一〇歳も違う世代の歌は知らないということもよくある。そのことを思えば、「故郷」は世代を超えて共有できる数少ない歌といえるだろう。歌詞もメロディーも心に染み入るという気がする。

【　B　】、この歌の歌詞は「兎追ひし」で始まるが、それでわかるのは、この歌が作られた頃は、日本人の多くがウサギを追った体験をしていたということであろう。【　C　】、今、野生のウサギを見たことのある人さえごく少なく、まして追いかけたことのある人はほぼいないといってよいだろう。【　D　】ウサギのいそうな場所がなくなってしまった。この変化は一体何を意味するのだろうか。

（中略）

ウサギは戦後もしばらくはたくさんいたし、明治時代以降ももちろん多かったが、それでも江戸時代などに比べればかなり少なくなったようだ。というのは『盛岡藩御狩り日記』（遠藤公男　一九九四）などによると、江戸時代、ウサギは本当に溢れるようにいたらしい。それが、明治時代以降、兵士の防寒具としてすぐれているということで大量に狩猟され、個体数は激減したようである。もちろんウサギは繁殖力が旺盛で、回復力もあったから、江戸時代ほどではないにせよ、昭和三〇年頃までは狩猟されながらも、ウ

サギはどこにでもいる野生動物であった。

レジャーの②多様化や自然保護思想の普及などによりハンターの数はどんどん減っている。しかも高齢化している。そうであればウサギが回復してもよさそうなものだが、実際には明らかに少なくなっている。「獲られていないのに減っている」というのはおかしなことだ。

その答えは③茅場の消滅にある。ウサギが生きるのにふさわしい茅場は、日本の農業の変化によって著しく少なくなってしまった。農家から家畜がいなくなり、堆肥も必要なくなったし、屋根も瓦葺きになったから、茅場もいらなくなった。こうして日本中から茅場が消滅した。ウサギの減少の原因はここにある。

猛禽類やキツネに狙われても狩猟で殺されても生き延びて、人間の子供にさえも追い回されるほどいたウサギは、④皮肉なことに狩猟もあまりされず、猛禽もいなくなった現在いなくなってしまった。それは茅場がなくなったためである。

茅場に生えるススキは茅葺き屋根の材料や家畜の飼料として農民にとって有用なものであったことを説明した。だが、農民の生活は生産活動という意味の農作業だけではなかった。自然に接しながら生きるということは、たいへんなことも多かったが、楽しみにも満ちていた。茅場をそのような観点からながめたとき、茅場のもうひとつの価値を見いだすことができる。

ススキは飾って愛でられ、それが麗しい伝統に磨き上げられた。ススキ群落は夕方の太陽が傾いたときに逆光で見ると実に美しい。また今ではススキは花屋で買うようになったので知らない人が多くなったが、花が出かけの頃は銀色で金属光沢があり、直線的な穂が重みで描く弧が幾何学的な美しさをみせる。

花といえば「華」であり、バラやチューリップ、⑤ボタンやシャクヤクを愛でるのが欧米や中国の美意識であろう。もちろん日本人に

⑥もあでやかな花に対する好みはあるが、そういう意味の華麗さからは縁遠いイネ科の花を愛でるという美意識は相当高いレベルにあるのではないか。しかも、それが貴族だけでなく、土を相手に重労働をしてきた農民がおこなってきたのである。

思えば□の七草は茅場の植物である。日本は森林の国であるが、ハギ、キキョウ、フジバカマ、クズ、ススキ、ナデシコ、オミナエシの七種の植物は「□の七草」とされ、どれも森林に生息するものではなく、明るい茅場を本拠地とするものばかりだ。古代から二〇世紀まで、大陸の文化の影響を受けながらも、独自の文化を築いてきた日本人は自然に対して独自の感性を育み、磨いてきた。その上で植物の存在は大きかった。春の七草は「E」であるが、□の七草は「愛でる草」である。その□の七草は自然林ではなく里山の茅場に生える植物である。

しかし、そうであるから茅場には珍しい植物もないし、珍しい動物もいない。そのことはふつうの「自然保護」の順位づけでいえば価値が低いことになり、守る価値があまりないということになる。だが、⑦七草に代表される群落を愛でるという、類まれな習慣を生み出したことは、世界に誇る文化であり、それは守るに値するものだといえないだろうか。

これで連想するのはイギリスのカントリーヘッジあるいはヘッジロウと呼ばれる生け垣である。これは産業革命の時代にヒツジ飼いが盛んになったとき、ヒツジの管理をしやすくするために牧場と牧場のあいだに作られたものであり、イギリスの重要な景観要素となっている。カントリーヘッジは木や低木を生きたまま折り曲げて束ねたり、囲んだりしたもので、ウェールズ、スコットランドなどで少しずつ違いがある。それは原生的自然という意味では貴重なものではないが、人によって生み出され、維持されてきたという意味ですぐれて文化的なものであり、価値のあるものである。そして、その生け垣があることでたくさんの昆虫や鳥類や哺乳類が生き延びて、生物の多様性を維持してきた。現在は牧羊のためには必要なくなったものの、伝統的な文化遺産として、また生物多様性を維持するためにその保護が進められている。

これと同じように考えれば、⑧日本の茅場は立派な文化遺産といえると思う。

（高槻成紀『唱歌「ふるさと」の生態学』による）

問1 ――線①「兎　追ひし」の意味を、文章中から五字以上十字以内でぬき出して答えなさい。

問2 【 A 】～【 D 】に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。（同じ記号は二度使えない。）

イ　さて　　ロ　だが　　ハ　あるいは　　ニ　そもそも

問3 ――線②「多様化」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　いろいろなものを使用するようになること　　ロ　さまざまな種類に分かれること

ハ　ひとりが関係するものの数が多くなること　　ニ　世間一般まで広がっていくこと

問4　――線③「茅場の消滅」について、次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1)「茅場」に生えている植物は何に利用されるか。文章中から五字以上十字以内で、二つぬき出して答えなさい。

(2)「茅場の消滅」の原因は何か。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　日本の農業の形態が変化し、日本の建築まで様変わりしてしまったから。

ロ　日本の農業の変化により、ウサギを飼う必要がなくなってしまったから。

ハ　日本の農家の減少により、日本人の自然を愛でる伝統が忘れられたから。

ニ　日本の農家から家畜が減少し、堆肥や茅葺き屋根が作れなくなったから。

問5　――線④「皮肉なことに」とあるが、どのようなことを「皮肉」だといっているのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　江戸時代には溢れるようにウサギがいたのに、明治時代以降は兵士の防寒具を作るために大量に狩猟され、絶滅（ぜつめつ）の危機にまで陥（おちい）ったこと。

ロ　ウサギは日本人に親しまれ歌にまでされていたのに、自然保護がさけばれるようになった現在、逆に数を減らしてしまっているということ。

ハ　人間の子供にまで追い回されるほどたくさんウサギはいたのに、それを捕まえるハンターが高齢化し、猛禽類も減少が進んでしまったこと。

ニ　猛禽類やハンターに狙われても生き延びていたのに、その存在が少なくなったにも関わらずウサギの数が明らかに減ってしまっていること。

問6　――線⑤「ボタンやシャクヤク」とあるが、「ボタン」と「シャクヤク」を使って美しい女性をたとえる言い回しになるように、【　1　】～【　3　】に当てはまる言葉の組み合わせを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

・【　1　】シャクヤク【　2　】ボタン【　3　】姿は百合の花

イ　1　跳ぶは　　2　踊るは　　3　歌う
ロ　1　見るは　　2　飾るは　　3　香る
ハ　1　立てば　　2　座れば　　3　歩く
ニ　1　泣けば　　2　笑えば　　3　怒る

問7　――線⑥「あでやかな」が正しく用いられている文を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　彼女のあでやかな包丁さばきで刺身ができた。
ロ　サッカーで兄があでやかなシュートを決めた。
ハ　テーブルの上にはあでやかな料理の皿が並ぶ。
ニ　バレリーナはあでやかな衣装で舞台に立った。

問8　四か所ある――線「□の七草」の□に共通して当てはまる漢字一字を考えて答えなさい。

問9　「E」に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　燃やす草　　ロ　食べる草　　ハ　遊ぶ草　　ニ　飾る草

問10　――線⑦「七草に代表される群落を愛でるという、類まれな習慣」とあるが、具体的にはどのような点が類まれなのか。次の説明文の【　　】に当てはまるように、十五字以上二十字以内で考えて答えなさい。

・他の国とは異なり【　　】花を愛でている点。

問11　――線⑧「日本の茅場は立派な文化遺産」といえるのはなぜか。その理由を説明している次の文の【　　】に当てはまる十八字の表現を文章中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。

・日本の茅場は【　　】から。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがあります。＊のついた説明は出題者が加えたものです。）

ぞうさん
ぞうさん
おはなが　ながいのね
そうよ
かあさんも　ながいのよ

（『まど・みちお全詩集』理論社、一九九二年所収、
まど・みちお童謡集「ぞうさん」より）

日本人でこの歌を知らない人は、まずいないんじゃないでしょうか。この「ぞうさん」の歌の詩を書いたのが、今回取り上げるまど・みちおさんです。まどさんはほかにも子どもの詩をたくさん書いています。「しろやぎさんから　おてがみ　ついた／くろやぎさんたら　よまずに　たべた」という、あの「やぎさんゆうびん」もまどさんの作品です。「一ねんせいに　なったら／一ねんせいになったら／ともだち　ひゃくにん　できるかな」もまどさんの作品です。まどさんは一九〇九年（明治四二）山口県徳山市で生まれました。今年で九十三歳になります。戦前は台湾総督府にツトめながら北原白秋に詩、童謡を学びました。戦後も子どもの詩をたくさん書き続けています。

私がまどさんの作品に興味が出てきたのは、この四、五年のことです。それ以前は「ぞうさん」のイメージが強くて、まどさんの書く子どもの詩は現代詩とは別のものだと思い込んでいました。ところが自分自身が子どもの詩を書くようになってから、まどさんの詩人としての大きさに気づいたのです。まどさんの詩は、現代詩とか子どもの詩とか童謡詩とかいったジャンル分けとは関係なく、いや、そんなつまらぬジャンル分けが吹っ飛んでしまうほど大きな仕事です。

現代詩はむずかしい、わかりにくい――そう思われてしまう理由は「テーマ」と「A」ではないでしょうか。現代詩で取り上げられるテーマは時代であり、人間の内面であり、普遍的な（＊全てのものに共通する）シンリであり、そのテーマをAするために、コトバは前衛的で（＊時代を先取っていて）、抽象的で、観念的で、ようするに一般の人には「サッパリわからん」ということになってしまっているように思えます。

もちろん詩には前衛も観念も必要なのです。前衛的なコトバ、観念的なコトバを「むずかしい」という理由だけでケイエンしていると、詩はどんどんやせ細っていきます。しかし、それはそれとして、まどさんの詩――ひらがなだけの、子どもにもわかる、誰にでもわかる、わかりやすいコトバで書かれた詩も、すぐれた大きな仕事なのです。

今回はまどさんのコトバのどういうところがすごいのか、どうしてみんなをあんなに夢中にさせてしまうのか、その秘密をじっくり見ていきたいと思います。

つけものの　おもし
つけものの　おもしは

あれは　なに　してるんだ

あそんでるように
[B]ように

おこってるように
わらってるように

すわってるように
ねころんでるように

ねぼけてるように
りきんでるように

こっちむきのように
あっちむきのように

おじいのように
おばあのように

つけものの　おもしは
[C]

（同、まど・みちお詩集「てんぷらぴりぴり」より）

まどさんの詩の特徴のひとつとして、「何でも書く」ということが挙げられます。びわ、犬、タマネギ、毛虫、ノミ、蚊、ポケット、しゃっくり、ドロップ、鼻紙、おにぎり、スルメ、石鹸、虹、地球、おなら。これらはすべてまどさんが詩にしたものです。まどさんは身の回りにあるものを何でも詩にしてしまいます。まどさんはきっと、世界に存在するものすべてを詩にしてしまいたいと考えているのです。この漬物石の詩もそうです。道端の石っころの詩は他の詩人が書いた詩で読んだことがありますが、漬物の石の詩を作ったのはたぶんまどさんが初めてです。書かれた漬物の石もさぞビックリしたことでしょう。「まどさん、詩にするんだったら私だってもうちょっと磨くなりしてカッコつけるのに。急に詩にしないでくださいよ」とあわて④□□□□漬物石の声が聞こえてきそうです。

道端の石（むずかしく言うと「路傍の石」。山本有三の有名な小説がありますね）には意味があります。[D]という意味です。この意味を推し進めると、権力に踏みつけられても健気に生きている庶民ということになって、それは文学の立派なテーマです。『路傍の石』という小説も、そこから書かれているわけです。しかし漬物石はどうでしょう。あんまり意味がありそうには思え

ませんね。せいぜいが、お尻の大きい女の人を想像するくらいです。まどさんは、その「意味のなさ」が気に入ったのだと思います。ごろんと世界にただ存在するもの。まどさんはそういうものを詩にしています。それがどんなものでも、ものとは本来「世界にただ存在するだけのもの」であるはずで、意味があるとかないとかにはそれこそ「意味がない」とまどさんは思っているのです。まどさんが大事にしているのは、ものと自分との間に一瞬流れる共感の電流です。この詩の、〈あれは　なに　してるんだ〉というフレーズにそれがよく出ています。漬物石とまどさんの間にピッと電流が走って、その瞬間、まどさんの気持ちは漬物石にひっついてしまうのです。

ひっついてしまうから、まどさんがものを観察する目はたしかです。「～のようで／のようで」の繰り返しは、どちらかに⑤決めかねているのではなくて、漬物石が両方の要素を持っていると言いたいのです。⑥「ああでもなくこうでもなく」と書かないのがまどさんです。「ああでもなくこうでもなく」は見る側の判断です。〈あれは　なに　してるんだ〉という問いの答えを求めています。しかし「～のようで／のようで」は答えを求めていません。その証拠に、詩の最後の一行は〈　C　〉なのです。まどさんは漬物石をあるがままに引き受けています。世界をあるがままに引き受けようとしています。

（ねじめ正一『言葉の力を贈りたい』による）

問1　――線①「北原白秋」と同時代の作家を、次の中から一人選んで記号で答えなさい。

イ　芥川龍之介　　ロ　清少納言　　ハ　俵万智　　ニ　松尾芭蕉

問2　――線②「そんなつまらぬジャンル分けが吹っ飛んでしまうほど大きな仕事です」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　人間の内面性や普遍性が子どもにもわかるように、ひらがなで現代詩を書いている。

ロ　ひらがなを使い誰にでもわかりやすい言葉で、身近なものを題材に詩を書いている。

ハ　むずかしいと思われている現代詩を、わかりやすく説明する詩を書いている。

ニ　前衛的で観念的なコトバを使って、これまでにない画期的な詩を書いている。

問3　二か所ある　A　に共通して当てはまる言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　観察　　ロ　写生　　ハ　想像　　ニ　表現

問4　――線③「詩はどんどんやせ細っていきます」とはどういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　現代詩としての長さが短くなってしまうということ。
ロ　言論の自由が失われた詩になってしまうということ。
ハ　詩として中身がないものになってしまうということ。
ニ　正しい内容を伝えない詩になってしまうということ。

問5　[B]に当てはまるものとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　うつむいてる　　ロ　しゃべってる　　ハ　とまってる　　ニ　はたらいてる

問6　二か所ある[C]に共通して当てはまる言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　ありの　ままだ　　ロ　あれは　なんだ　　ハ　つけものの　いしだ　　ニ　なにも　してない

問7　――線④「あわて□□□□」の□□□□に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　ふためく　　ロ　ときめく　　ハ　さざめく　　ニ　うごめく

問8　[D]に当てはまる表現として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　いつか周りを見返してやりたくても、何もできない悲しい存在
ロ　たくさんありすぎて、誰もがじゃまだと感じるうとましい存在
ハ　誰にも振り向かれず、ただ踏まれているだけのつまらない存在
ニ　弱く見えるが、踏まれたことは決して忘れないおそろしい存在

問9　――線⑤「決めかねている」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　決めた方がいい　　ロ　決めつけてしまう　　ハ　決めることが難しい　　ニ　決めたいと思っている

問10　――線⑥「『ああでもなくこうでもなく』と書かないのがまどさんです」とあるが、そのように筆者が考えている理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　世界に存在するものをあるがままにとらえたいと、まどさんは考えているから。

ロ　自分自身の目で実際に観察したことを書きたいと、まどさんは考えているから。

ハ　詩の題材については読む人に判断してほしいと、まどさんは考えているから。

ニ　ものと自分との間にある共感の電流が大切だと、まどさんは考えているから。

問11　═線a「ツトめ」、b「シンリ」、c「ケイエン」のカタカナの部分を漢字に直しなさい。

大妻

国語解答用紙

座席番号

受験番号

氏名

一

問1

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問9

問10

問11

問12

c

d

問13

二

問1

問2

A

B

C

D

問3

問4

(1)

(2)

問5

問6

問7

問8

問9

問10

問11

三

問1

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問9

問10

問11

a

b

c

め

H 28 A